研究ノート

リオタールへの旅
ジュネーブ・コペー・エディンバラ
～「ある婦人の肖像」（1761）をめぐるフィールド・ワークの記録～

滝口　明子

L' âme voyageuse, Jean-Etienne Liotard et un portrait d'une jolie fille inconnue

Akiko Takiguchi, née Maruyama

はじめに
1. スイス　　ジュネーブとコペー
2. スコットランド　　エディンバラ
3. シュザンヌとは誰か
おわりに
注

はじめに

18 世紀ヨーロッパ精神と生活文化の理想について探究しようとするとき、ひとつの方法として、絵画をとおしてのアプローチがある。筆者は、「トルコ装束の画家」peintre turc と呼ばれるスイス出身の画家 J. E. リオタール（Jean=Etienne Liotard , 1702-1789 ）研究の途上で、「ある婦人の肖像」（図 1 ）という一枚の絵に出会い、魅了され、この絵を通して、同時代のヨーロッパ精神と生活理想の一面を読み取ることはできないだろうかと考えるようになった。(注 1) 本稿は、そのきっかけとなった旅、ヨーロッパにおける海外調査（2014 年～ 2015 年）とその後の文献調査の成果の一部をまとめたものである。リオタールは、未知の部分の多い知られざる画家で、それゆえにこそ興味深く、新たな発見のよろこびも大きい。今後のリオタール研究のための覚書、現在の到達地点を示す中間報告として、このフィールド・ノートを作成した。

1.　スイス

ジュネーブ

リオタールは、スイス、ジュネーブ出身の画家で、パステル画や七宝焼の肖像画を得意とした。30 歳代の 4 年間ほどトルコのイスタンブールに滞在した。その地の風物を愛し、ヨーロッパに戻って遍歴の旅を続ける間も、髭、帽子、衣装など、トルコ風の装いを身につけた。そのため「トルコ装束の画家」と呼ばれることもある。トルコの人々を描いたデッサンには興味深いものが多く、同時代のヨーロッパ諸国の王侯貴族やジュネーブの一般市民の肖像画、自画像、妻や家族を描いた日常画にも優れた作品が多い。人物として

は、例えばヴォルテールやルソー、デピネ夫人、マリア･テレジアやマリー･アントワネット、イギリス王室の人々や貴族、イギリスの名優ギャリック、イタリア人アルガロッティなどを描いている。

1789年、フランス革命勃発の年、リオタールは87歳で世を去る。最晩年の自画像は東洋の仙人のような飄々とした姿で、そこはかとないユーモアも感じられて、私の好きな絵のひとつになっている。27歳年下の愛妻マリ（Marie Fargue, Delft1728-Genève1782）に先立たれて、また髭を伸ばし始めている。リオタールにとって最大のパトロンであったハプスブルク帝国の女帝マリア・テレジア（Maria Theresia, 1717 ～ 1780, 在位 1740 ～ 80）は、すでに1780年にこの世から旅立っていた。フランス宮廷に嫁いだ末娘マリー・アントワネット（Marie Antoinette, 1755-1793）の行く末を、最期まで気遣っていた。男系が絶え、国家存亡の危機の時代に、人間的で、英明果断な女帝をえたオーストリアはまことに幸運であったとされている。

1995年夏、私の初めての海外研修先はスイス、ジュネーブ大学だった。その時は、もちろんジュネーブが生んだ画家リオタールのことなど全く知らなかった。2014年と2015年のジュネーブ再訪の目的は、17、18世紀の茶書とリオタール関連調査だった。2014年には、2004年に文通を開始していたリオタール研究の第一人者マルセル・ロートリスベルガー教授とカタログ・レゾネの共著者ルネ・ロッシュ女史のおふたりに初めてお会いすることができた。同教授は三人で会食する機会を設けてくださり、ルネ・ロッシュ女史は、私が茶の比較文化史研究をしていることを知り、ぜひフィリップ・ニーゼル氏に会うようにと勧めて下さった。

紹介を受け、ご好意に甘えて、ニーゼル氏のお宅を訪問した。ニーゼル氏は、長年日本に滞在し、茶道に傾倒して茶室を持ち、「スイス人にしておくのはもったいない」と言われた人物である。愛知万博の折は、スイス館の担当者として美智子上皇后陛下をご案内したことをとても懐かしく誇らしい思い出として話して下さった。若い日に、和歌と日本の古典文学に関心を持ち、来日されたとのことである。私など足元にも及ばないほど、和歌にも日本の茶の湯にも詳しく、ずっと日本語で話をされた。ニーゼル氏と私は、茶とリオタールと日本文化という三つの関心を共有していることがわかり、たいへん驚いた。

リオタールに関してニーゼル氏から聞いたお話で、特に印象に残っているのは二つの絵に関することだった。「イブラヒム」君と「ヴェルムヌウ夫人の肖像」（図２）である。

前者は、リオタールがトルコ滞在中に描いたデッサンで、蚤の市で見つけたとのこと。そうして発掘し、所有してらっしゃる絵が、複製画あるいは版画なのかなどについては聞かなかった。それよりむしろ、その絵に描かれている人物、トルコのこびと「イブラヒム君」に、親しみと愛着を持っておられることが、その口ぶりから感じられて、その発見を私も一緒に喜んだ。

「ヴェルムヌウ夫人の肖像」については、数年前スイスで展覧会があった時の絵葉書などを見せていただいた。さりげない話ぶりだったが、私の聞き違いでなければ、この貴婦人は、ニーゼル氏のご先祖に当たる方らしい。たいへん裕福な美人の未亡人とあって、言い寄る殿方も多かったが、もう結婚は懲り懲りとのことで、再婚はなさらなかったとのこと。家族に代々伝わる物語を、ユーモア漂

う口調で話して下さった。ヴェルムヌウ夫人はジュネーブの医師テオドール・トロンシャンへの感謝のしるしとして贈るため、この肖像画をリオタールに依頼したという。スイスは美しい自然―山々と湖、植物や澄んだ空気に恵まれている。ヨーロッパの人々にとっては、心身を癒す場所として絶好の場所だったと思われる。(注2)

2015年の海外研修は、スイス、エディンバラ、オランダの順に廻った。ジュネーブでは、主にジュネーブ大学図書館貴重書室と歴史美術博物館に通った。

ジュネーブ歴史美術博物館には、リオタールを中心としたパステル画が展示された部屋がある。円形のホールのようなスペースで、光は眩しすぎず、自然な光が適度に入るようになっていた。リオタールの絵の他に印象に残ったのは、パステリストとして知られるカリエラの青い服の婦人図とモーリス・カンタン・ド・ラ・トゥールの自画像だった。

その部屋に展示されていたリオタールの作品は、ほぼ全てジュネーブ市民の肖像画だったと思う。特別展ではなく、大きな美術館の常設展示室の一隅。丸い広間のような場所で、他に誰もいなかった。ひとつひとつゆっくり眺めていたら、急に後ろから声をかける人がいる。背が高く体格の良い、まるでスイスの傭兵の子孫のように頑強そうな青年だった。美術館の学芸員というよりは、警備員の方(かた)だったかもしれない。日本から来たこと、リオタールに関心があることなどを話した。そのひとは、いくつか並んだ肖像画の中から、とくに自分のお気に入りの絵に私の注意を促して、「ほら、綺麗でしょう。綺麗でしょ。綺麗ですねえ！」と本当に嬉しそうに、語りかける。その青年の心からの礼讃の気持ちーそれは描かれている人物と描いた画家と両方に捧げる讃美―をとても強く感じた。7年も経った今も、このときのことを鮮明に覚えている。その絵に描かれていた人物は、若く美しい乙女、ではなくて、テニソンのThe Oakの詩でいえば、Gold againの年頃の、輝くような笑顔と白髪の美しい婦人だった。

リオタール作品を見たあと、別の大きな展示室を廻っていた時、スタール夫人(Madame de Staël, 1766-1817)の肖像が目に止まり、撮影した。(図3)文学史で名前を覚えた有名な女性。しかし、そのひとの姿を描いた肖像画を見るのは初めてだった。天井に近い高い場所に展示してあったその肖像画には、はっとするくらい生き生きした知的な若い女性が描かれていて、私の学生時代の友人の表情にそっくりだったので、思わず二枚写真をとった。スイスでもオランダでも、研究のために美術館や博物館を見学したが、写真撮影禁止の場所もあれば、撮影が認められている場合もあった。絵葉書があれば必ず購入し、それを研究資料として保存整理しているが、無い場合、作品の写真撮影ができることは、大変ありがたいと思う。

コペー

2015年、ロートリスベルガー先生は、今度は家にいらっしゃいと、コペーにあるご自宅に招いて下さった。私は、その朝、滞在先のジュネーブからスイス鉄道に乗ってコペーへ向かった。先生は、コペーの駅まで自家用車で迎えに来てくださることになっていた。

コペーの駅は、ジュネーブとは全く雰囲気が違う。ずっと静かで、乗降客はまばらだった。自動車でお家に向かう途中、いったん車を止めて、ここがコペーの城館、と教えて下

さった。ジュネーブ歴史美術館で初めて肖像画を見た、あのスタール夫人ゆかりの場所だ。車を降りて、見学したいと思ったけれど、今は中には入れないとのことだった。建物や聳え立つ門とは反対側に、まっすぐ続く細い散歩道が見える。緑の背の高い樹々は、ポプラだろうか。そんなはずはないのに、以前、遠い昔に見たことのある風景のようだった。その一瞬の風光を写真におさめることはできなかったけれど､このなぜか「懐かしい並木道」は、一枚の絵として、今も私の心の眼の底に実在している。この日の先生との談話については、また稿を改めることにして、エディンバラへ進みたい。

2. スコットランド

エディンバラ　2015 年 9 月 2 日

今回の旅のハイライトは、スコットランドの古都エディンバラで開催されるリオタール展覧会だった。

その絵は会場の一番奥に、飾られていた。パステル画は光に弱いことを考慮して、全体の照明は抑えられている。この日、人影は多くもなく、少な過ぎるということもなくて、展示されている絵や七宝焼、細密画などを静かに落ち着いて見て廻ることができた。リオタールがイタリアで描いたイギリス王室の人々、ステュアート朝ゆかりの人々、イギリス人貴族やジョンソン博士と同郷でロンドンに出て一世を風靡したギャリックの肖像などもあり、イギリス、スコットランドでの展覧会の特色が展示作品にもあらわれていた。あまり広くない会場で、順路に沿ってゆっくり作品を見て歩くことができた。奥の片隅まで来た時、その絵と対面し、心が声にならない叫び声を上げた。ああ、この人だ。この人は私が会いたかった人だ。もう何年も前からリオタールに関心を持ち、追いかけていたはずなのに、この絵のことは、その日まで、全く知らなかった。

生き生きした瞳、微笑み、優しさ、柔和、知性、教養、気高さ、気品、高貴さ、優雅、爽やか、魂の清らかさ、純粋さ、無垢、初々しさ、慈愛…

どんな言葉でこの乙女の美しさを、あらわすことができるだろう。国境や民族や身分や階級を越えて、伝わるものがある。光の世紀とされる 18 世紀に生きていたひと、その日常生活。その絵から発散している柔和で慈愛に満ちた清々しい雰囲気。純粋で静かな自然の精霊のようなひとに思える。その絵のすぐそばに立って、何かとても不思議な懐かしい気持ちを感じながら、21 世紀の現代から私だけがタイムスリップして、このひとと直接、相対している感覚を持った。これまでライフワークとして研究を続けてきたヨーロッパ文化とその精神、あるいは生活理想がその人の姿形をとって、そこにフワッと浮かんでいる感じがして、その場を立ち去り難く、魅了されて立ち尽くしていた。

少し落ち着いて、また絵を眺めてみる。背景は、シャルダンとよく似たとても静かで落ち着く茶色または焦茶色をしている。婦人は本を左手に持っていて、テーブルの上には、水差しとコップ、桃や葡萄などを盛った果物籠、パンとナイフなどが見える。とても自然な雰囲気で、心地よいあたたかさを感じる。それは、おそらく、この若い婦人と画家のあいだの人間的共感や親密さが、絵の中に反映

しているためかもしれない。

この絵のすぐ右隣に、対になるような絵が飾られているのに気づく。(図４) 若い男性とその左側に立つ男の子。男性は恋文を書いているところのように見える。

この２枚の絵は、リオタールのパステル画としては、大きなサイズで描かれている。ほぼ同じ大きさの「ラヴェルニュ家の朝食」(図５) は今回の展覧会には展示されていないが、リオタールの最も美しいパステル画の一つとされている。

この３作品を比較してみると、さまざまな発見や気づきがあり、興味深い。静物の描き方、人物の配置、構図、テーブルの引き出しの少し開いているところなど、シャルダンの絵を想わせる。制作年代は、図１は1761年頃、図４は1752年、図５は1754年であり、RLの解説によれば、図４と図５はリヨンのリオタールの親戚の家族をモデルに描かれたものらしい。図１と図４の絵は、ウィーンのマリア・テレジアの、図５の絵は、リオタールをトルコへの旅に誘ったイギリス人貴族の所有となった。(注３)

いずれもリオタールのパステル画家としての本領が発揮された美しい作品で、私はエディンバラで、そのうちの二作品を実際に見ることができたことになる。天の恵み、ということばに相応しい貴重な体験だった。実物、本物を自分自身の感覚で直接体験することは、藝術や歴史だけでなく、自然と文化の研究のために極めて重要で、基礎的かつ必須の体験といえる。出発点に、直接の体験があること。それは研究者にとって、貴重な宝であると思う。その直観を忘れずにいれば、研究者は困難に遭遇しても、自分の内部の声に耳を傾けながら、さらに文献資料や遺物の探索を続けることができる。そのような考えから、以上の各章では、まずスイスとエディンバラでの自分自身の体験と見聞を、その時の直観や感覚を大切にしつつ記述するよう努めた。

次章では、「ある婦人の肖像」(1761) に焦点を合わせて、この絵に描かれた婦人はどんなひとだったのか、手紙や伝記などのなかから、18世紀人の証言を集めて再構築してみたい。

3. シュザンヌとは誰か

エディンバラ展覧会で一番印象に残った絵「ある婦人の肖像」に描かれているひとの名は、シュザンヌ・キュルショー (Suzanne Curchod, 1737- 1794) だった。この人の名を、私はエディンバラに行くまで、全く聞いたことがなかった。リオタールとシュザンヌのふたりは、今、私がその姿を追い求め、いつの日か語ろうとしているhistoire 歴史＝物語の中では、最重要の中軸となる主人公たちだが、世界史上は、ほとんど無名の「忘れられた人たち」と言ってよい。しかし、このふたりの主人公は、歴史の表舞台には立たなかったかもしれないが、歴史上よく知られた大物たちのそばにいて、重要な事件に立ち会い、その大物たちと直接言葉を交わした人たちだったことが、少しずつ明らかになってきた。

海外調査から帰り、文献資料を読み、調べを進める中で、そのような興味深い人間的交流に気づき始めた。それは、まさに、点と点が線となって繋がるような、天空に無数に煌めいている星々が、無関係ではなく、つながりを持ち、意味を持つ星座として見えてくるような感覚だった。この絵を見たことをきっかけとして、18世紀のヨーロッパの人々の暮らしが、ぐっと身近に実体を持つものとして感じられるようになった。色と形があり、

香りや声が感じられ、手を伸ばせば触れられそうな気がする。それこそが、「歴史としての藝術を読む」ことの意味であり、醍醐味なのではないかと考えるようになった。(注4)

シュザンヌとは、誰か。伝記的事実として確認できたことをまとめると、以下のようになる。シュザンヌは、ローザンヌ近郊のクラシーの村の教養あるプロテスタントの牧師のひとり娘で、イギリスの歴史家ギボンの初恋の人であり、両親の死後、この絵が描かれた1761年、24歳前後には、スイス滞在中のヴェルムヌウ夫人の幼い息子の家庭教師となる。1764年、27歳の頃、ジュネーブ出身でパリで活躍していた32歳の銀行家ネッケル（Jacques Necker, 1732-1804）と結婚する。そして1766年に生まれたネッケル夫妻のひとり娘こそ、のちのスタール夫人なのだった。つまり、シュザンヌは、「ギボンの恋人」であり、「ネッケルの妻」であり、「スタール夫人の母」だったということになる。(注5)

本章では、シュザンヌがどんなひとだったのか、その人格、人柄や雰囲気を知るための手がかりとして、まずギボンの証言を聞いてみることにしたい。

歴史家ギボンに聞く

エドワード・ギボン（Edward Gibbon, 1737-94）は、『ローマ帝国衰亡史』で知られるイギリス人歴史家である。この全6巻に及ぶ大著は、1776年アメリカ独立宣言の年に最初の部分が刊行され、後半の東ローマ帝国の部分（1453年の滅亡まで）は、1788年フランス革命直前に刊行された。ギボンは、まだ40歳前後の若さで、全く無名だったが、独力で最初の部分を刊行した。『ローマ帝国衰亡史』は刊行後たちまち圧倒的な成功をおさめ、「衰亡」すなわち衰微と滅亡 the Decline and Fall が街の流行語になるほどだったという。200年を経た現在でも、この著作に対する評価は少しも失われておらず、ギボンは、「他に並ぶものなきローマ史家」the historian of the Roman Empire と呼ばれるようになった。(注6)

若き日のギボンは、1753年に国教会（プロテスタント）への信仰を棄て、ローマ・カトリックに改宗した。そのためオックスフォード大学を追放され、父親の手でスイス、ローザンヌへ移された。スイスではプロテスタントの牧師の家に預けられ、翌年、プロテスタントに再改宗する。1758年、満21歳になって、英国からの追放が解除されて帰国するまでの5年間、ギボンはローザンヌでフランス語を日常の言語として暮らし、ラテン、ギリシャの古典文学と歴史書を読み耽る。「私は故国と母校から放逐されたおかげで歴史家になれた」という自伝の言葉は広く知られている。

『ギボン自伝』（没後出版　1796）は、古今東西の伝記文学の中の傑作であると私は思う。シュザンヌとの関わりから最近読み始めたもので、まだ十分に読みこなしているとは言えないが、ギボン自身の人生や人生観だけでなく同時代のヨーロッパの文化や精神のあり方についても、学ぶことが多い。饒舌や衒学的な文体とはほど遠く、シンプルだが力強く、雄渾で、ユーモアや含蓄や余韻を感じさせる文体。生きている人間の生活を感じさせる味わい深い文体といえるのではないかと思う。

さて、ギボンは自伝の別の箇所で、「私は恋人として溜息をつき、息子として服従した」と語っている。この恋が実らなかったあと、ギボンは全く結婚の意思を捨て、生涯独

身をとおした。そしてこれは、私たちの主題「ある婦人の肖像」と関わる言葉でもある。

シュザンヌとは誰か。どんな人だったのか。ここでは、少し長くなるが、ギボンが若き日の恋について語っている箇所を岩波文庫版から引用しておきたい。(注7)

> ここで私は、我が若き日の恋という扱いにくい題目に入るが、世人の嘲笑を招きはせぬかと筆が渋る。私の言う恋とはお上品な慇懃さではない。かの騎士道精神に発してフランス礼法の布地に織り込まれている、野心も底意もない婦人への親切をさすものではない。この情熱とは、欲情・友情・情愛の一つに結びついたものである。ただ一人の女によって燃え立た締められ、他の凡ての異性に勝ってその女に心ひかれ、生活の最高唯一の幸福として彼女を我物にせんと求める気持ちだと解釈する。私の選んだ相手を今思い出しても、私は毫も恥いるに及ばないし、又、私の恋は不首尾に終わりはしたが、自分が嘗てあのような清い高貴な感情を抱き得たことを寧ろ誇りと思っている。スーザン・キュルショー嬢は容姿が美しいばかりでなく、心の美徳や才能によってそれが一段と光っていた。家産はさして豊かではなかったが、家柄は立派なものであった。彼女の母は生粋の仏蘭西人であったが、その祖国よりも己が信仰の方を大事と考えた。彼女の父は、穏やかな学問好きな気質を職業のために失うことなく、ペイ・ドゥ・ヴォーとブルグンディア州とを分つ山奥の村クラッシーの牧師という微賤な地位に在って、薄給と劇務とに甘んじて暮らしていた。寂しい陬僻(すうへき)の山里に住みながら、その独り娘には高等普通教育を、否学者にふさわしい教育さえ授けた。彼女は父の望み以上に学問や言語に精通し、キュルショー嬢がローザンヌの親戚訪問に出て来た時は、彼女の才智・美貌・学殖を誰もが口々に賞讃した。かく世に稀な才媛の噂が、私の好奇心を目覚ませ、私は一目見るなり惚れ込んだ。彼女は、博学ながら少しも衒わず、会話はきびきびし、感情は汚れがなく、作法は優雅であったが、この最初の唐突な感激が、更に親しく付き合って一層深く知るに従いますます強められた。二、三度彼女はその父の家を訪れて彼女に会うことを許してくれた。私はそのブルグンディアの山中で楽しい数日を過ごしたが、彼女の両親は見上げた理解を以て二人の交際を奨励してくれた。静かな山奥に暮らしていた彼女の胸には、青春の派手好きな虚栄心は最早波打って居らず、彼女は真実と愛情の声に耳を傾けてくれたし、又私は徳操の堅い彼女の心に多少の感銘を與えたと見なしても、あながち自分の贔屓目ではないようだ。こうしてクラッシーやローザンヌでは、幸福の夢に浸っていたが、さて英国へ帰ってみると、父はこの変わり種の結婚をてんで取り上げないし、彼の同意を得なければ私自身一文無しで何の力も持たない有様であった。私は苦しい煩悶の末運命に屈服し、恋人として歎息(ためいき)を吐(つ)き、息子として命に従った。私の痛手は、歳月と遠隔と新生活の習慣とによって、何時しか癒された。この治癒は、相手の婦人自身が平静・快活にしているという信ずべき情報を得て一層早められ、私の愛は鎮まって友情や尊敬に変わった。クラッシーの牧師はその後間もなく世を

去り、同時にその俸給も途絶えた。娘はゼネヴァに詫び住まいし、若い娘たちに物を教えて、どうにか母君と自分の米塩の資を稼いだが、貧弱のどん底にあっても、汚れのない評判と品位ある行状とを持ち続けた。やがてゼネヴァの市民であるパリの富裕な銀行家が、幸運かつ賢明にも、この千金の宝を見つけて我手に収め、彼女は趣味と贅澤との首都にあって、恰も先に貧困の艱難に耐えた如く、富につけ入る誘惑を撃退した。彼女の夫はその天才によって欧羅巴における最も顕著な地位に昇った。栄華と汚辱の移り変わる度毎に彼はいつも忠実な友の胸に凭れたのであるが、今仏蘭西王國の大臣にして且つ恐らく立法者たるネッカー氏の夫人こそは、そのかみのキュルショー嬢である。(注8)

歴史家ギボンの筆が描いた初恋の人の肖像画がここにある。これはおそらく「分析」や「解説」の対象ではなく、その文体とともに味わい、筆者の気持ちに想いを馳せるのがふさわしい文章かもしれない。

ギボンとシュザンヌは、ともに1737年に生まれ、1794年に逝去している。年譜によれば、ギボンが英国にもどったのは1758年なので、ここにmy early loveとして記述のある二人の相思相愛の恋は1757年前後、20歳頃のことと思われる。さらに自伝を読めば、ギボンはネッケル夫妻と、よき友人として、生涯を通じて親しく交際していることがわかる。

マリア・テレジアの手紙

リオタール画「ある婦人の肖像」(c. 1761)をめぐる今回の旅も終わりに近づいた。

最後に、この絵の所有者であったマリア・テレジアの言葉を伝えて結びとしたい。

1770年4月、女帝マリア・テレジアの14歳の末娘マリー・アントワネットは、フランス、ブルボン王家に輿入れのためウィーンを旅立つ。以後、マリア・テレジアが、1780年11月29日に63歳でこの世を去るまで、母と娘の間に11年間にわたって秘密の往復書簡が交わされた。その往復書簡の編者パウル・クリストフによれば、手紙の目的は、娘の人間形成と教育、すなわち「手紙によって啓発し、警告をあたえ、助言をし、指示を出し、あるいは必死になって諭す」ためだったという。(注9)

一方、1764年、27歳で結婚し、ネッケル夫人となったシュザンヌは、パリでサロンを開き、1772年に銀行家から転身して政界へ進出した夫ジャック・ネッケルを良く支えた。やがてネッケルは、マリー・アントワネットの夫君、ルイ十六世の下で財政を担当する大臣の要職に就くことになる。つまり、ウィーンのマリア・テレジアから見ると、ネッケル夫妻は娘夫婦のそばにいる重要人物だったことがわかる。そしてまた、お気に入りの画家リオタールと同じように、ネッケル氏もネッケル夫人シュザンヌも、ジュネーブやローザンヌなど、スイスの自然や風土と深いつながりを持つ人たちだった。以上のことを、頭において、次のマリア・テレジアの手紙を読んでみよう。

マリア・テレジアの手紙（1780年3月）
パリ駐在オーストリア大使　メルシー・アルジャントー伯爵　　宛[注10]

「あなた［メルシー］は、また、ネッケル夫人に、次のような話を伝えて下さってもよろしいと思います。今から十数年前のこと、ジュネーブ出身の画家、リオタールが当地に滞在しておりましたとき、私はリオタールの描いた作品を見たいと思いました。その時リオタールが持参していた二枚のうち一枚の絵を見た瞬間、私は強く打たれました。若く美しい乙女が、とても心ひかれる風情で、片手に本を持つ姿が描かれていたのです。私は、その絵に魅了されて、心が虜になってしまい、（即座に決断して）その絵を手に入れました。そして、その絵は、［ほかならぬ貴女（あなた）］、ネッケル夫人の肖像画だったのです。今も大きなよろこびとともに、私はその絵を何度も拝見しています。先回リオタールがこちらに参りました時、その絵が自分の手元にないことをとても残念がって、私に模写の許可を願い出ました。私は模写することを許しましたが、元の絵を手放すことは決してしませんでした。その絵は、今も私のそばを離れずにいてくれて、私の居間を飾っています。」[注11]

このマリア・テレジアの手紙は、私にとっては大発見だった。マリア・テレジアの忠臣メルシー伯爵は、フランス革命期にベルギーに逃れ、懸命にマリー・アントワネットと連絡を取りあい、最後はロンドンに移って晩年を過ごしたという。この人がマリア・テレジアの手紙を大切に保存してくれていたことに、感謝する。そのおかげで、この18世紀、啓蒙の世紀の傑出した君主が身近に眺めていた絵があったこと、その絵が彼女に大きなよろこびを与えていたことを、私たちは知ることができる。一枚の同じ絵を見て、その美しさに感動する人間のこころ。それは、時空を越えて、変わらない。どんな人間にも共通する普遍的なものがあることを、教えてくれているように思う。

リオタールの手紙を読むと、マリア・テレジアの言うとおり、1777年から1778年にかけてのウィーン滞在中、この絵の模写を願い出て、作業を続けていることが確認できる。リオタールは、自作の模写をすることは稀だったというから、この絵は画家本人にとっても、特別のものだったことがわかる。

歴史家ギボンにとってのシュザンヌが、終生忘れ得ぬ宝物のような人 this inestimable treasure であったとすれば、女帝マリア・テレジアにとっても、この絵は、日常生活の中で、身近にあって、人間的なよろこびや心のやすらぎを与えてくれる宝物だったのであろう。そして、画家自身にとっても、かけがえのない大切な宝石のような作品であったと思われる。今後の課題として、画家の手紙と絵画論を再読しながら、そのことを確かめてみたいと考えている。

おわりに

海外調査から7年後の今、このフィールド・ノートを書くことをとおして新たに気づいたことは多い。人間は書くことによって、あるいは書こうとすることによって、過去を想起し、忘れないでおくことができる。最大の収穫は、それを自分の実感として知ったことだ

ろうか。これは、文化史の研究を続ける上で大きな支えとなるだろう。また、書くことによって、過去が蘇ることの不思議さに気づくこともできた。エディンバラ展覧会に行く前に、私はすでにスイスで、シュザンヌに関わる人々（ニーゼル氏とヴェルムヌウ夫人）や絵（若き日のスタール夫人）や場所（コペー）に出会っていた。そのことが、この旅の最も大きな不思議だったかもしれない。

「アジアの葉」と呼ばれる茶は、ヨーロッパにおいてどのように受け入れられたのか。茶はヨーロッパの人々によって、どのように受容され、普及し定着していったのか。筆者は、そうしたヨーロッパ独自の茶文化の誕生過程に関心を持ち、これまで研究を続けてきた。茶書や絵画、茶道具、あるいは文学作品、日記、手紙、新聞など、さまざまな「もの」と「ことば」の中に埋もれた茶の痕跡を発掘し、解読する作業は、地を這うように地味なもので、考古学とも少し似ている。そして、おそらくその地味な発掘調査の苦労のなかにこそ、きらっと光るよろこびがある。「大いなるよろこびは研究そのものにあるのです。結果にではありません。希望にみちて旅していること、そのことのほうが目的地に到達することよりもいいのです。」（生物学者セント＝ジェルジ博士のことば）そんなわけで、どこまで進めるかはわからないけれど、中世の南仏やヨーロッパ各地を歌って歩いた吟遊詩人のように、私もまたひとりの旅びととして、未知の世界への旅を続けたいと思う。

注

(1) リオタールに関する基礎的事項と研究資料等に関しては、拙論「「トルコ装束の画家」リオタール研究序説ー文化史的考察」『東洋研究』第 215 号 (51) 頁ー (75) 頁 2020 年 1 月を参照。なお、本稿では、リオタールの絵画総目録（カタログ・レゾネ）である Marcel Roethlisberger et René Loche, *Liotard: catalogue, sources et correspondance,* (Doornspijk, 2008) を RL と略記する。

(2) RL: 567-8.　この絵は、リオタールが描いた寓意的な絵としては、唯一のものという。デピネ夫人も、5 年前に自分の肖像画をリオタールに依頼し、トロンシャン医師に贈っている。この絵に関する同時代人の手紙なども残されていて、興味深い。

(3) ダンカノン子爵、1758 年以降、第 2 代ベスバラ伯爵となる。William Ponsonby, Viscount Duncannon, Future Second Earl of Bessborough, 1704-1793.

(4) G.B. サンソム George B. Sansom『世界史における日本』(岩波新書 1951) pp.52-53 参照。

(5) ネッケルはフランスの財政家、政治家。ジュネーブ近郊のコペーの生まれ。イギリス系プロテスタントの家系に属し、父は法学教授。一説によると、ネッケルは、美しく裕福な未亡人だったヴェルムヌウ夫人の数多い求婚者の一人だったとも言われる。スタール夫人に関しては、工藤庸子『評伝　スタール夫人と近代ヨーロッパ：　フランス革命とナポレオン独裁を生きぬいた自由主義の母』(東京大学出版会　2016) を参照。

(6) ギボンに関しては、中野好之氏の解説を参照。中野好之氏は『ローマ帝国衰亡史』の共訳者であり、『ギボン自伝』の訳者でもある。中野好之訳『ギボン自伝』(筑摩書房　1994)。

(7) 村上至孝訳　『ギボン自敍傳（我生涯と著作との思ひ出)』(岩波文庫　1951) pp.116-119. なお、引用に際し、旧字体、旧仮名遣いを一部新字体に修正するなど、筆者が変更した部分がある。英語原文 *Memoirs of My Life and Writings, by Edward Gibbon* は *Project Gutenberg* のサイトを参照。

(8) シュザンヌ（英語読みではスーザン）の人となりをあらわす言葉としては、以下のような語句が印象に残る。

The personal attractions of Mademoiselle Susan Curchod were embellished by the virtues and talents of the mind.

・教育については a liberal and even learned education

・Proficiency in the sciences and languages

・the wit, the beauty, and erudition

Wit は the capacity of inventive thought, keen intelligence, quick understanding などの意味がある。知力、理解力、賢明さなどを示唆すると思われる。

Erudition：erudire = instruct, train　知的訓練を受けて知識、学識がある

・I found her learned without pedantry, lively in conversation, pure in sentiment, and elegant in manners

・a virtuous heart

・a spotless reputation

・a dignified behavior

・resisted the temptations of wealth　パリの生活（奢侈にも惑わされなかったこと）

(9) マリー・アントワネット，マリア・テレジア著　パウル・クリストフ編　藤川芳朗訳『マリー・アントワネットとマリア・テレジア秘密の往復書簡』（岩波書店　2002）p.viii 参照。

(10) フロリモン・メルシー＝アルジャントー伯爵は、ベルギーのリエージュ出身。金羊毛騎士団員。1770 年 43 歳の時、フランス駐在オーストリア大使となって以来「世にも稀な忠誠心をもって」心服する女帝に仕えたという。マリア・テレジアとマリー・アントワネットの往復書簡を取り次ぐ重要な役割を果たした人物。

(11) RL: 533.　原文は以下の通り。

Lettre de Marie-Thérèse du 3 mars 1780 au comte de Mercy-Argenteau à Paris:

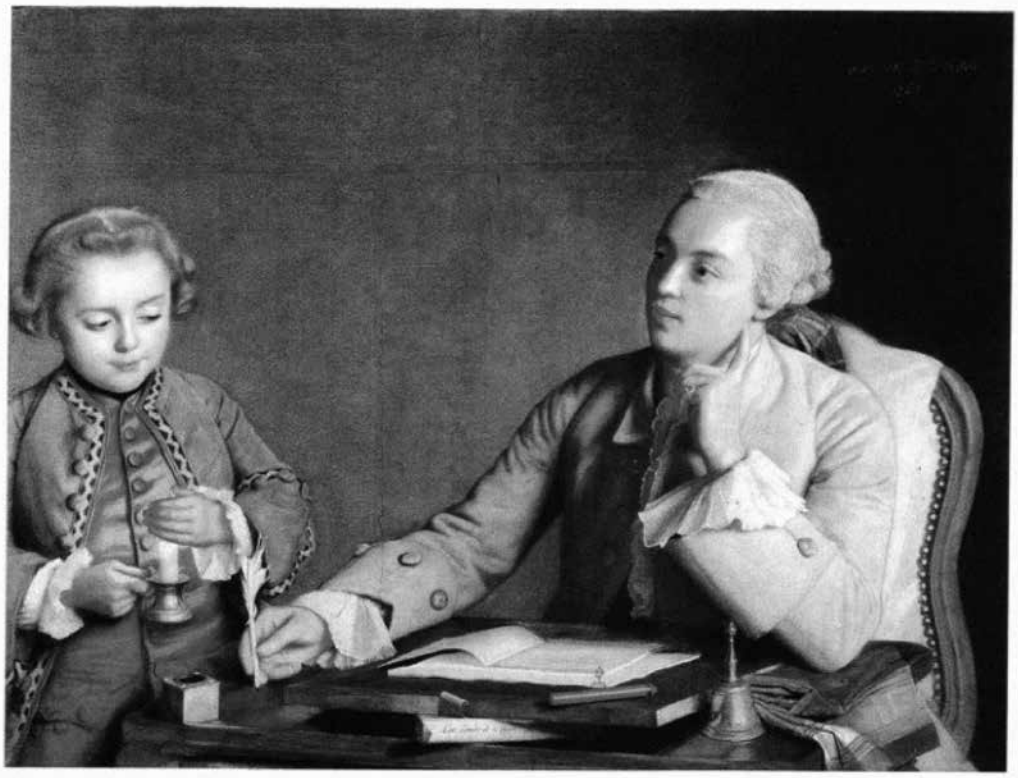
“Vous pourriez encore faire savoir à Mme Necker que, le peintre Liotard, de Genève, se trouvant ici il y a plusieurs années, j’ai voulu examiner ses tableaux, parmis lesquels j’étais surtout frappée de l’un d’eux qui représentait une jolie jeune personne avec un livre à la main dans une attitude bien intéressante. Je me suis attachée à ce tableau et j’en ai fait l’acquisition: c’est le portrait de Mme de Necker, que je regarde encore plusieurs fois avec Plaisir. Dans le temps que Liotard s’est retrouvé ici la dernière fois, il a fait voir de la peine de n’être plus possesseur de ce tableau, et m’a demandé de pouvoir en tirer copie. Je lui ai accordé, mais j’ai gardé l’original [qui est dans mon cabinet]”

図版

図１：「ある婦人の肖像」（1761 年頃）　　出典：ＲＬ
540 Cat.380 : Suzanne Curchod. Pasterl. 85.5/104.7cm. Vienne, Schönbrunn.（c.1761）

図２：「ヴェルムヌウ夫人の肖像」(1764)　出典：ＲＬ
619 Cat.429. Madame de Vermenoux remerciant Apollon. Pastel. 120/95cm. 1764.

図 3:「スタール夫人」 ジュネーブ歴史美術博物館 (筆者撮影)



333. Cat. 200. *L'Ecriture*. Pastel. 81 x 107 cm. Lyon 1752. Vienne, Schönbruna

図４：「手紙」（1752）　出典：ＲＬ
333 Cat. 200: L’ Ecriture. Pastel. 81/107cm. Lyon 1752. Vienne, Schönbrunn

図５:「ラヴェルニュ家の朝食」(1754)　出典：ＲＬ
435 Cat. 299: Déjeuner Lavergne. Pastel. 80/ 100 cm. 1754. Collection privée européene